

書評

## 外山滋比古「思考の整理学」 (筑摩書房 1983年)

柴田 秀一\*

英文学者でお茶の水女子大名誉教授の外山滋比古氏が2020年7月30日午前7時18分、胆管癌の為亡くなった。96歳だった。

外山氏は、1923年（大正12年）関東大震災の年に今の愛知県西尾市で生まれる。第二次戦終戦後東京文理大学（現筑波大学）英文科を卒業、英語研究誌「英語青年」編集長に就く。東京教育大（現筑波大）助教授を経て1968年から御茶ノ水女子大教授、1989年から昭和女子大教授を務めた。

専門の英文学で「シェークスピアと近代」など古典の他、日本語、言葉の問題にも関心が高く、欧米の言語にない独自性を考えた「日本語の理論」、俳句の特性を論じた「省略の文学」「ことわざの論理」などを記し、幼児教育の重要性も訴えた。

また、読者は作者の意図と違う読み方をすることで創造に参加し、読書の在り方が音読から黙読に変化する過程を考えた「近代読者論」で発想力豊かな理論を著した。300を超える著書がある。

生き方、考え方のヒントといったテーマも得意で、1983年（昭和58年）に刊行された

「思考の整理学」は34年のロングセラーとなった。国語の教科書や入試問題に頻出する著者としても知られている。旺盛な執筆活動で2019年に「老いの練習帳」を出版するなど最近まで執筆・講演活動を続けていた。勲三等旭日中授賞受賞。

2020年8月7日の新聞各紙は、写真入りで大きく外山氏の訃報を伝えた。産経新聞は、氏が、1979年から「正論」欄の執筆メンバーであったことから1面と社会面27面での両面展開になった。社会面では、自分で考える大切さを強調、AI時代の到来を予言。「AIと渡り合うには機会が不得手なところで勝負するほかない」と生き抜くためのヒントを提示、知識偏重に警鐘を鳴らしたと書いた。英文学者になったのは、戦時中学生だった頃、教師からドイツ語を学ぶように勧められたが、日本語とは別の魅力があるように感じ英語研究に没頭したという。自らを「戦時中に敵国の英語を学んだ変わり者」と呼んだそうである。

また、東京新聞は、ベストセラー「思考の整理学」が何故今も読まれるのか、記者が2019年の新刊本でインタビューしたときの答えを載せ「読む人は違うけれど、同じように面白いとってくれる。借りたり盗んだりした考えではないので古くならないのでしょう」と明瞭な答えが返ってきたと書いている。そもそもこの著書のきっかけは、御茶ノ水女子大時代に抱いた知識偏重学習への危機感が出発点「知識だけいくら集めても人間の成長につながらないのでは。それより、自分の頭で考える思考の方が重要」と語った。

東京大学、京都大学の学生生活協同組合の書籍販売ランキングで毎年上位に入るなど、学生の必

---

\*しばた しゅういち 日本大学法学部新聞学科 教授

読書となっているのは、外山氏の意識が若者に届いたからに違いないと結論付けている。高校野球の大阪桐蔭高校で春夏の甲子園大会3回優勝し、2018年プロ野球ドラフト1位で中日に入った根尾昂（あきら）が愛読書に上げたそうである。そのことでも販売部数が伸びたようだ。

因みに、東京新聞の記事ではないが、「文春オンライン」に、根尾が参考にしたのは「思考の整理学」中のⅡ章にある「寝させる」だったそうだ。自分は元来ショート一本で守備をしたかったが、試合出場の可能性がある投手をやり、野手も経験し、その間ショートへの思いをいわば「寝かせ」て、入団会見に当たり「ショート一本」と公言した。

先ほど述べたように、東大、京大生協の販売ランキングはこの10年ほぼ毎年3位以内である。文庫版の帯によると、2012年だけ東大11位、京大18位の他は2008年から2011年迄両大生協で4年連続1位、2014年から2019年ではどちらかが必ず1位という具合である。

何故、そう読まれているか。

KADOKAWAの雑誌「ダ・ヴィンチ」電子版（2018/3/8）の「225万部突破！なぜ『思考の整理学』は東大生から根強く支持されるのか？」の記事によると、2008年には東大・京大生協の書籍販売ランキングで1位を獲得し、“東大・京大で一番読まれた本”のフレーズが生まれた。

もともとは、2007年岩手県の「さわやか書店」の店頭に「もっと若い時に読んでいけば…」

とのポップ広告（商品紹介カード）をきっかけに人気が再燃したという。この言葉で帯を作ったところ売り上げが加速したという。2009年類型発行部数100万部突破、2016年には文庫化30年目にして200万部を突破した。この記事には、外山滋比古氏の講演会を聞いた東大生の感想が載っている。

「知識に偏った勉強をしてきたからこそ、それじゃいけないんだ、と思いを新たにした。」

「大学やその先で求められている「学び」に対する姿勢が、少し分かった気がする。」

「今の時代に必要なのは、情報を手に入れることよりも「捨てる」ことなのだ。」

「この本を読んでいないなんて、人生の半分を損している。」

知識を詰め込むだけでは、考える力は養われない”という著者のメッセージは、知識偏重型の勉強をしてきた東大や京大の学生をはじめ、多くの読者に伝わっていると結論づけている。

さて、「思考の整理学」である。

## 目次

- |     |          |           |         |          |     |
|-----|----------|-----------|---------|----------|-----|
| I   | ライダー     | 不幸な逆説     | 朝飯前     |          |     |
| II  | 醜 醜      | 寝させる      | カクテル    | エディターシップ | 触 媒 |
|     | アナロジー    | セレンディピティー |         |          |     |
| III | 情報の“メタ”化 | スクラップ     | カード・ノート | つんどく法    |     |
|     | 手帳とノート   | メタ・ノート    |         |          |     |
| IV  | 整 理      | 忘却のさまざま   | 時の試練    | すてる      |     |

とにかく書いてみる      テーマと題名      ホメテヤラネバ

V シャベる      談笑の間      垣根を越えて      三上・三中      知 恵

VI 第一次的実現      既知・未知      拡散と収斂      コンピューター

あとがき

文庫本のあとがきにかえて

文章は、非常に読みやすい。一つの題が6ページ以内にコンパクトに収まることで次々に読みたいと思ひ。もうこれだけ読めたと喜ぶことになるので興味深い。

章だてごとのテーマとして書いてあることが大変わかりやすく、はっきりしている。

I. は物事の考え方。訃報を伝えた各紙や、書籍紹介等でも必ず引用されるグライダー論（グライダーは滑空することはできるが、自ら空には行けない。グライダー的人間を育ててはいけなひ。）が最初に載っている章である。自分で考え行動することの必要性を訴えている。

II. は「寝かせる」ことである。「考え」も「本」も「資料」も寝かせないと必要性がわからなひと説く。先に登場したプロ野球中日ドラゴンズの根尾が参考にした考え方である。

III. が情報の整理、整頓、分類について 新聞切り抜き・カード・ノートにまとめる。これができると自分に必要な情報がはっきりしてくるはずである。でも整理整頓がなかなかできにくいのが常だ。

IV. は一転。そうした手に入れた情報などを一旦「忘れる」「捨てる」こと。いったん休んで、別のことをすることが重要と説く。また、とにかく「考えを書いてみる」ことが書かれている。そして能力が上がるのは褒めることとも述べる。

V. は「喋る」「話し合う」話すことでの情報交換や、うっかり得意げに思いついたことを話してはいけなひという注釈もついているが、話すことで考えが広がり発想が湧くということも指摘している。

VI. は「第一次的実現・第二次的現実」、「既知・未知」、「拡散と収斂」という相対する思考形態を使い、考えをどう醸成するか書かれている。

この章の最後に「コンピューター」という題目がある。1983年の本書刊行当時は、パーソナルコンピューターを買いに、秋葉原の電気街に客の行列ができる世の中で、NECがリードする形で各電器メーカーが相次いでパソコンのニューモデルを出した。まだ、メイド喫茶ができる以前の話である。世を挙げてブームをおこしたパソコン。先端のPCを自由に使える人が尊敬されたときに、本文では「今までは、コンピューターの的に記憶や知識を蓄えている人材が重用されたが（コンピューターが使われるようになると）、これからの人間は機械やコンピューターにできない仕事どれくらい良くてできるかによって、社会的有用性に違いが出てくることははっきりしている。」と指摘している。

そしてこれが最初の章Iの、「グライダー」自分の頭で考えることが必要であるとの文章に戻る。

かくして知識偏重でなく「自ら考えること」というこの本の柱が貫かれているわけである。

すらすら読める理由は、それぞれの単元に、次の単元の予告が入っていて、重要な単語が何度も違う章にも出てくるので記憶に残る。その言葉に当たると、あの章にも、あの単元にも出てきたと思出す。おそらく外山先生はこういう授業をされていたのだらうと自分自身の講座の参考になるところが多々あった。

学生を中心に売れているのは、I章に論文の書き方についてのエピソードがかかっているからであろうとは推測できた。3月になると増し刷りされ、2020年8月6日現在124刷253万部以上を数えるのもわかる。

最後は、東京新聞の訃報で、90半ばを超えた齢での新刊出版時のインタビューで、氏が述べた言葉で結びたい。

「面白いな、誰も言っていないな、新しいな、書きたいなと。ただ思っているだけでなく言葉にしたい」研究者には金言ではないか。

### 参考資料

朝日新聞 2020/8/7金 朝刊

文春オンライン 文藝春秋 2019/03/07公開 <https://bunshun.jp/articles/-/10966>

ダ・ヴィンチ 月刊誌 KADOKAWA2018/3/8公開 <https://ddnavi.com/news/440447/a/>

日本経済新聞 2020/8/7金 朝刊

産経新聞 2020/8/7金 朝刊

東京新聞 2020/8/7金 朝刊

読売新聞 2020/8/7金 朝刊